

帰去来の辞 — いわゆる教育を去る

An address of “Come Away Home” ; leaving so-called Education

歸去來兮 田園將蕪胡不歸 陶淵明
朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり 孔子

この世で大学ほど美しいものはない
なぜならそこは無知を憎む人間が知識を得るために努力し
真実を見たものがそれを広めようと努力する場所だからだ

J.メイスフィールド

大学を退職するにあたって、「大学とは何か？」を再考している。学生・研究生・院生として、2 大学、1 研究所をへて、大学助手になり、その後 40 年を同じ大学で過ごした。大学に入学したのは 1968 年で、学園紛争の真ただ中であつた。デモやストの中でも、子どもころからの意思により、アジア・アフリカのこと、植物のことに興味を中心をおいて学んでいた。当時の某大学生たちの一部は「大学解体」を叫び、教室をバリケード封鎖、学びを阻害し、石の代わりに凶書を投げる輩もいた。私は非暴力不服従が本旨で、当初はアジア・アフリカ連帯委員会に参加していたので、知らないうちにいわゆる代々木系全学連（民青）シンパということになっていた。しかし、後ろから扇動する活動家の現実を見るにつけ、反代々木系全学連（三派）も含めて、どの党派にも加わることができなかつた。結局、大学 3 年生のころまでに、個人として行動する全共闘ノンセクトあるいはベ平和連といったところに心情が落ち着いた。4 年生になる前に、同じ党派の中でも仲間割れを続ける学生政治運動に一層の嫌気がさし、植物研究の世界に向かうことにして、国立遺伝学研究所の阪本寧男の押しかけ弟子になった。土佐自由党に加わらず、東京に出て植物学者になろうとした先達牧野富太郎翁に習つたのである。

1970 年ころにはすでに四大公害が顕在化して、公害反対運動が盛んになっていた。理学部生であつたのに、公害に加担した科学に全面的な信頼を寄せられなくなつたので、水俣病患者さん支援のための学生行動委員会に参加した。大学院農学研究科生で、トウモロコシの栽培やら、生物化学実験のとても厳しい時間の中で、患者さんや学生たちとともに興銀前のテントに出入りし、宇井純ら自主講座『公害原論』の学生たちと環境庁座り込み、街頭でのカンパ集めに加わつた。

修士課程修了前に、教授から就職を薦められ、「日本の農業教育」を立て直すという、とても重いミッションを与えられて、大学助手になった。大企業や中央官庁には勤めないと決めていたし、植物研究を続けたかつたので博士課程理学研究科に進学しようかとも考えてはいた。農学部が第 2 理学部的で、農業を学ぶ場ではないと違和感をもつたからである。しかし、就職せねばならないという私的事情によって、教授のご厚意を甘受

して、いくぶん批判的にみてきた大学の教官になり、20代半ばにして早くも学生ではなくなった。こうして、学生たちに吊上げられる側になって、若干の恐怖心を抱いて大学に住み着いたのであるが、このころにはもう学生運動は骨なしになっていた。そこで元気がない学生たちを励まして、一緒に学びと遊びの世界に誘うようにしようと、大学探検部を創設することにした。

今、「大学とは何か？」を再考するにあたって、20歳代のころに読もうと購入していた本を読みなおしている。特集「学問の可能性」が『状況』第96巻（1976）に掲載されていた。中でも特に関心を引いた論考は丸山（1976）の「学問と魔術—全共闘以後」であった。全共闘運動が敗退した後、当時の学生たちが批判した大学と学問をさらに問いただす活動の、わずかな可能性を公害と医療に関わる市民（住民）運動に見出すしかない。現在、さらに学問論が必要なら、その変革の方法を示さねばならない。しかし、大学には真の学者はいないとまで言い切り、学問に対するニヒリズムが強力に根付いてしまっているなかで、自滅的崩壊のさなかに学問の可能性を考えることはとても困難な作業だと、彼は述べている。ただ、数少ないが立派な学者はおり、彼らは全体としての学問を一個人としてどこまでやりきるか挑戦し、その自律した主体として学問の方法を確立すべく、苦闘していることに、真の学者への信頼をつないでいる。学部生のころに全共闘ノンセクトとして自己を位置付けた著者に対しても、丸山（1976）は大学に残った者の責任として学問論を明かすように、過去から来たって求めているのである。

民主主義のもとで、生命を奪われない自由、学び考える自由、は現代市民社会における文化的進化の最も基本的な成果である。しかし、フロム（1941）は、次のように述べている。近代人は前個人的社会の絆からは自由になったが、個人の知的な、感情的な感覚的な諸能力の表現という積極的な意味での自由を獲得していない。自由は独立と合理性を与えたが、個人を耐えがたい孤独に陥れた。この結果、個人は自由の重荷から逃れて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性とに基づいた積極的な自由の実現に進むのか、二者択一を迫られた。自発的な活動（愛と仕事）によって自我を実現し、自己を外界に関係づけるならば、孤立ではなく全体の部分となり、正当な地位を得る。活動的創造的個人を自覚し、人生の意味がただ一つ、生きる行為そのものであることを認める。ニヒリズムというものは日常のあちこちにあつて、無関心や逃避や安易な意味づけの形で、私たちの心にすると忍び込む（重田 2013）。自由からの逃走、学びからの逃走（佐藤 2000）はこのことを指しているのである。厳しい現実をよく見すえ、学び考え、人生でなしたい仕事を見つけ、楽しく暮らす、逞しい自由人になれるとよい。

個人主義は個人の固有価値を問い続けるが、自己と同様に他者を思いやる教養豊かな拡大個人としては、本来、トランスパーソナルである。『超克』（倉田百三 1924）を改めて読み直してみると、超克とは確かにトランスパーソナルを含んだ到達目標であった。彼は次のように述べている。精神生活とは現実を理想に一致せしめんとして、現実を超

克していく生命の過程である。超克は否定ではなく、包摂し、止揚することである。人間、超人を超克して聖人になり、その後再び民衆に「没落」して、民衆の仲間になる。さらに、関東大震災を経験した後、おそるべき出来事がある人生をいかに調和あるものと感じて、生きる喜びを感じることができるか、これが最も大きな問題である。個人意識に終始する限り、恐るべき事件をもつ世界を肯定して生きることはできない。個人意識以上の人類意識、宇宙意識（信仰）をしながら個人意識として把握するべきである。近代人は個人意識を重んじ、人類的宇宙的本能を発達させてこなかった。近代人は自然科学の限界や本質を粗雑に理解しているにすぎず、教養が足りない。この信仰に立って、しかる後に環境を改造し、不合理な経済組織を改革する文化史的必然がある。しかし、環境や経済を改造すれば解決が得られるのではなく、生きがいの問題は残されたままである。

教育の対象は先生から伝達される集団（客体）であり、これに対して学習は自ら学ぶ個人（主体）である。学問とは、自分が生きる術を学び、自分に生きる道を問うことである。制度としての学校教育による学歴は教養と相関はあるであろうが、残念ながら、昨今の高い学歴は教養を保証していない。なぜ、身のまわりから世界までを学ばず、考えないのか。知ったことを語ることから逃げるのか。なぜ自由を奪い殺すのか、なぜ自由を捨てて自死するのか。孤独に耐えられない、孤独から連帯へと抜ける道が見えないのだろうか。受験教育の中で、お山の大将、おれ一人、あとからくるものつき落とせ。これでよいのか。公正な切磋琢磨はよいが、ともに学び合うほうが楽しいし、良いのではないのか。私は育った町内の高校に入学したとたん、先生から某大学をめざせ、ラグビーなどより、受験に役立つ科学部に入れと言われ、さらに、初恋の娘の兄からもこの大学に入れないのは人生の落伍者だとまで言われ、恋路を邪魔された。この時から某大学には敵意を抱き、まったく受験しなかった。このような受験教育は世界中に蔓延して、人間に序列をつけ、差別している。さらに、学問にも差別をつけ、物理科学が至上で、芸術は主要ではなく、受験教育にはいらぬとする。しかし、美しい人生に音楽や絵画などの芸術・芸能はなくてはならないものだ。個人は向学心、好奇心にしたがって、いろいろなことを、ただ一回の短い人生で学びたいのであって、受験教育など施されたくはない。受験教育は学びたい人々の集まりである「大学」の本旨ではないはずだ。たった1点の差で、若者の希望を断つような作業はあまりに苦かった。

大学や大学生は本来好きだった。大学に勤めて、ある程度、植物研究も続けられたし、家族も養えたし、ありがたくは思っている。しかし、この大学には高い建学の精神がなく、理念において論理的でないことが気に入らなかつた。リベラルアーツ（学芸）をめざすと誇りをもって言ったはずなのに、法人化する際に教員養成に特化すると言い出した。第2次世界大戦に敗戦した後、教員養成も大学で行うとしたはずだ。しかし、大学組織の保身のために歴史に逆行して、再び師範学校に退行しようというのだ。個人としては異論を唱えて掉したが、教授会で学問論も大学論も議論することなく、教育の理

想も本質も探究しない。教員養成といっても、大半の教授たちは教材、プログラムやカリキュラムを開発研究しているのではない。専門の研究をすることのみを望んでいる。教育学部としての歴史の重みを誇りにするのなら、専門研究の上に教育研究を重ねることこそ、他学部とは異なる存在意義であり、理念的論理性ではないのか。日本の教育を改善する提案をすることが「基幹大学」としての役割であるはずなのに、早くも保身に走り、委縮した「改革」を提示しても、軽蔑されるだけだ。教育が大事な行為だとするのなら、教育研究に励み、政策立案者や行政担当者を含めて、広く世の中を納得させる努力をすべきだ。

人生の大半の 46 年間、大学に居住した。短い人生で、批判的精神をもって努力したが、実現したことも、実現しなかったこともあった。余生はもう一度、原初的な学びに回帰し、その場を創り直してみたい。山村で日本村塾、あったはずの「大学」カレッジを開きたい。先生、試験、授業料、卒業証書、などはない。塾生だけがいて、あるのは向学心と未来のくにへの想い、自然、むらの暮らし、図書、民具だけである。

(黍稷農季人 2014.2.9)